

「安楽寺略縁起」に関する二・三の問題

——住蓮房の身代わり説と『松虫鈴虫和讃』——

伊 藤 正 順

一 小稿の目的

筆者はこれまでに、住蓮房が松虫姫を安楽房が鈴虫姫を剃髪出家させたことに始まる安楽寺の縁起（建永の法難）について、いくつかの問題を提起して愚見を述べてきた。⁽¹⁾ その結果、現在流伝している「安楽寺略縁起」⁽²⁾の内容が、室町時代か、それ以降にまとめられたものであると結論づけた。⁽³⁾ このことを論証するために、筆者が先の論文で指摘した松虫姫・鈴虫姫の名前が初出する文献であると考えている大分市・浄土真宗西本願寺派専想寺所蔵・談義本『松虫鈴虫物語』は、非常に注目すべき文献であると思われる。

小稿では『松虫鈴虫物語』などに示されている住蓮房が法然上人の身代わりとなって処刑された記述に注目し、あまり知られていない住蓮房の人柄について考察してみたい。また、三種類の『松虫鈴虫和讃』の特徴について触れていきたい。

二 建永の法難と「安楽寺略縁起」

今日、浄土門系について流伝している各宗の祖師の伝記や寺院の縁起について検討してみると、その歴史がたとえば鎌倉時代の事項であったとしても、後世の加筆や改竄などによって、室町時代（中世）に流行した伝承文学の中でまとめられたものがあるように思われる。「安楽寺略縁起」の内容もその一例であって、先の論文で指摘した⁽⁴⁾ように、安楽寺の各縁起書に必ず示される松虫姫・鈴虫姫の名前は、室町時代に作られた談義本（説教本）や法然上人の各伝記の中に突如として登場してくるのである。したがって、建永の法難の記述について、鎌倉時代の文献と、両姫が登場する室町時代以降の文献とはその内容が違っている。

しかし、後鳥羽上皇の官女の出家が住蓮房・安楽房の処刑に関与したという史実は全くなかったわけではない。たとえば『勅修御伝』卷三十三には、

住蓮安楽等のともがら、東山鹿谷にして別時念仏をはじめ、六時礼讃をつとむ。さだまれるふし拍子なく、をの／＼哀歎悲喜の音曲をなすさま、めづらしくたうとかりければ、聴衆おほくあつまりて、発心する人もあまたきこえしなかに、御所の御留守の女房出家の事ありける程に、還幸ののち、あしさまに讒し申人やありけん。⁽⁶⁾

とある。また『愚管抄』卷六には、

院の小御所の女房仁和寺の御むろの御母まじりにこれを信じて、みそかに安楽など云ものよびよせて（中略）

夜さへとどめなどする事出きたり、とかく云ばかりなくて終に安樂住蓮願切られけり。⁽⁷⁾

とあるように、後鳥羽上皇に仕える官女の出家が引き金となって建永の法難が勃発したことは間違いないのである。やがて、この史実は室町時代に入って住蓮房が松虫姫を、安樂房が鈴虫姫を出家させたという伝承（縁起）となった。そしてこの伝承（縁起）は女人往生を強調する蓮如上人の時代から説教の中に用いられ、とくに浄土真宗における布教の中で語り継がれ、現在流传している「安樂寺略縁起」の内容となったのである。⁽⁸⁾

住蓮房と安樂房が六時礼讃を始めたことは、諸伝の記述から間違いないであろう。しかし、このことが法難の一つの口実となったとは思われるが、法難の直接原因になったとは考えられない。なぜなら『歎異抄』の末尾に、住蓮房と安樂房のほかに西意善緯房・性願房の二人も処刑されたと伝えられているのはなぜか疑問である。ましてや、法然上人や親鸞聖人の流罪も起こらなかったであろう。つまり、建永の法難は、法難に対し朝廷や貴族が積極的な態度を示さざるを得ない深い理由があったに違いないのである。⁽¹⁰⁾

それでは処刑を宣告された四人のうち、なぜ住蓮房と安樂房がその当事者となったのであろうか。⁽¹¹⁾日本一の美僧⁽¹²⁾であり、六時礼讃を勤めたことが多くの聴衆を魅力させ、官女を出家させたことは間違いないであろうが、この他に処刑に及んだ理由はないであろうか。この点について、両上人の生涯や偉業、人柄を通じて検討していきたい。

三 安樂房と建永の法難

建永の法難によって処刑されたと伝えられている四人のうち、住蓮房と安樂房の出世、偉業、処刑のことについて

てはすでに論文で紹介した。⁽¹³⁾ 安楽房については、『勅修御伝』の中にもたびたび登場しているので、その性格も周知知られているように思われる。

安楽房の人は、六時礼讃に音曲を附し布教に勤めたこと、父師秀に『逆修説法』を修せしめたと考えられることから、大衆に浄土門を真摯な態度で教線を拡張した有能な弟子であったようである。その一方で、『選択集』の一部を助筆したが、法然上人に向かって暴言したため退室を命ぜられたこと、元久三年（一二〇六）行空とともに配流を命ぜられたこと、建永二年（一二〇七）二月九日、罪状を問われた時『法事讃』の文を声高らかに唱えたので、逆鱗がいよいよ盛んとなって六条河原で斬首となったことを考えると、弟子の中でもとりわけ自信家であり、時として高慢な態度であった性格が想像できるであろう。

さて、先の論文で指摘したように⁽¹⁴⁾、建永の法難の記述について浄土宗に流伝している各種の法然上人伝には、処刑の原因について「いかなる事かありけん」とか「不思議をしめして」とあるように、処刑の史実を隠すような記述がなされていた。このような記述から、とくに安楽房は『選択集』の筆記役を外されたことなど、その高慢な態度から宗門より疎外されたと考えられている趣があった。しかし最近の研究によれば、安楽房も他の十人の弟子と同様に『選択集』を附属されており、これをもって関東方面を布教して、正治二年（一二〇〇）に渋谷道遍を専修念仏教団に入門されたことが指摘されている。⁽¹⁶⁾ したがって、安楽房は『選択集』の附属が物語るように、教団から疎外されるようなことはなかったといえるであろう。

四 住蓮房と建永の法難

一方、住蓮房については法然上人の伝記類の中に、安樂房と同様に武士の出身であること、六時礼讃を勤めたこと、馬淵において三十九歳の時に斬首となったことの記述以外はないようである。したがって、その性格もはっきりしない。しかし、処刑地とされる馬淵をはじめ住蓮房の遺跡は安樂房の遺跡より多く、その遺跡に伝えられている文献などを辿ると、安樂房とは違った性格が読みとれる。

まず、筆者が両姫の名前が初出する文献と考えている大分市専想寺所蔵・談義本『松虫鈴虫物語』には次のようにある。

両姫を出家させたのは法然上人の所行であることが判明し、院の御所からその翌日に流罪に処すと命ぜられた。たまたま末座に居合わせた住蓮房は、ぜひとも師匠の命に代わりたいと志願し、京都七条の辺りに住む母に会い別れを告げた。馬淵にて処刑される際、住蓮房は法然上人に最後の手紙を書いたことを次のように記している。

極悪深重ノ衆生、他力往生ヲトケントオモハンヒト、住蓮ヲ手本トテスヘキトテ、一首ヲヨミケリ、

極悪ニムマレンコトノウレシサニ

身ヲハホトケニマカセケルカナ

トカキテ三十九歳ニテキラレケリ。⁽¹⁷⁾

処刑に立ち合った佐々木ノ九郎吉真は、この手紙を法然上人に渡し、さらに住蓮房の母のもとに届けた。母は号

泣し、せめて遺骨をこの手で拾いたいと、杖をついて近江国へ足を向けた。しかし関山のはとりで倒れ、八十三歳で亡くなったと伝えている。その最後には、

松虫・鈴虫、十九・十七ニテ出家シケルト、住蓮カ善知識ノ命ニカハリケルコト、マコトニ惡道ヲオソレ、極樂ヲネカフコ、ロサシ、ナミタモト、マラス。念仏往生ヲトケントオモハンヒト、住蓮ヲテホントスヘキモノナリ。タ、信心決定シテ、念仏申シタマハ、松虫・鈴虫・住蓮トヒトツハチスニ生センコト、ナニノウタカヒアルヘシ。南无阿弥陀仏⁽¹⁸⁾。

と結んでいる。

先の論文で指摘した⁽¹⁹⁾ように、この『松虫鈴虫物語』の内容は、同じ談義本である『松虫鈴虫讃嘆文』（仮題）と伝隆寛上人作『法然上人秘伝』の内容とはほぼ同じである。これらの文献は、両姫を出家させたのは法然上人であると伝えている点に大きな特徴がある。この点は「安楽寺略縁起」とは異なるが、「安楽寺略縁起」の成立以前にこれらの文献（少なくとも二本の談義本）がまとめられたことはすでに指摘した通りである。

また、ここに示されている住蓮房の母の記述であるが、現在、滋賀県守山市焰魔堂町市村長一氏宅には、住蓮房の墓石と並んで住蓮房の母の墓石がある。

市村氏が所蔵する「市村長左衛門住道曰」と奥付のある資料「住蓮房母公墓の由来」には、次のようにある。

住蓮房の母は朝子といい、（京都）六波羅に住んでいた。母は住蓮房が両姫の出家を許した罪と、念仏停止の砌念仏を唱えた咎として死罪になる旨を聞き、ぜひとも生前中に一目会いたいと馬淵に向かった。しかし、すでに住蓮房の首が打たれていると聞き、もはやこの世で生きながえる希望を失い、草津と守山の間にある焰魔堂の池に入

水したと伝えている。法号は住然と授けられたと記されている。

また、市村氏宅から東一キロメートルあたりにある栗太郡栗東町総の大宝神社には、住蓮房の首を打ったとされる刃渡り三尺の太刃が宝物として所蔵されている。

大宝神社所蔵「元治元年（一八六四）六月」と奥書がある資料「住蓮安楽両上人伝説之控」には、住蓮房の母の命日が承元元年（一二〇七）三月二十三日であると伝えている。またこの資料の奥付に「太刃之縁起来由ハ別記ニ書ス」とある。その別紙資料には、（江戸時代になって）市村氏宅に災難が続いたため、市村家の子孫の伊勢屋治兵衛が延宝五年（一六七七）四月六日に太刃を大宝神社に預け入れたと記されている。

この他に住蓮房の遺跡地には、滋賀県近江八幡市千僧供町の住蓮房安楽房御僧塚、同町の住蓮房首洗いの池、同町の易行寺⁽²⁰⁾のほか、神戸市須磨区の願成寺⁽²¹⁾などがある。

市村氏宅の伝承、大宝神社での伝承とともに、住蓮房が法然上人の身代わりになったとする記述はないが、全国各地にある住蓮房の遺跡にある文献を繙いてみると、住蓮房は後世にその人格が偲ばれるような人柄ではなかったかと想像されるのである。『松虫鈴虫物語』にみられる住蓮房が安楽房の身代わりとなった説はどれほど信憑性があるかは不明であるが、「安楽寺略縁起」より古い伝承であることは確かである。したがって総合的に判断してみると、住蓮房の辞世の詠に示されているように、専修念仏に対する真摯な態度が後世、法然上人の身代わり説となつて伝えられていると考えられるのである。

五 「安楽寺略縁起」と『松虫鈴虫和讃』

安楽寺の縁起は、「安楽寺略縁起」の他に三種類の『松虫鈴虫和讃』によって知ることができる。この項では、それぞれの特徴について考察していきたい。

安楽寺の縁起を記す資料は、先の論文⁽²²⁾で述べたように細部で異説があり統一性に欠けている。その中で、「鹿ヶ谷草庵」で出家した両姫が、後鳥羽上皇のもとを離れるために紀州の粉河(寺)に身を隠したと伝えられていることは、おおむね共通している。

その後の両姫は、次の二説がある。

① 両上人の斬罪は、両姫が後鳥羽上皇の許可を得ることなく出家したことが起因であると嘆き、「鹿ヶ谷草庵」のほとりで自害したとする説⁽²³⁾。

② 如念法尼(親子内親王)に導かれ、瀬戸内海に浮かぶ生口島光明坊(光明三昧院)において余生を過ごしたとする説⁽²⁴⁾。

このうち、②の説が主流のようである。なぜなら、多くの文献が後者の説をとっていることその他に、安楽寺が寺宝として所蔵している掛軸のうち「安楽寺縁起絵」⁽²⁵⁾(一幅)は後者の説に一致するからである。

また、この二説について三種類の『松虫鈴虫和讃』では次のように伝えている。

まず二十句本では、法然上人が七十五歳の時に土佐国に流罪になったことを記しているが、出家剃髪以後の両姫⁽²⁶⁾

のことや、兩上人の処刑については触れていない。

次に三十七句本では、法然上人が七十五歳の時に土佐国に流罪になったことを記している。そして、このことを粉河（寺）において人づてに聞いた兩姫は、

御痛はしやわが祖師の

円光大師もろともに

七十五歳の老のはる

念仏停止とさだまりて

かうむり玉ふその上に

ころもに変わるかり衣を

慈悲の御身に纏ひてぞ

勿体なくも土佐の国

流罪にならせたまふ由

紀州粉川に聞ゆれば

心もと無きふたかたは

加太の浦より船に乗

御跡したひ申さんと

行方もあらず出で給ふ

と結んでいるように、法然上人を追慕するために、加太浦から行き先も告げないで消え去ったと伝えている。兩上人の処刑については触れていない。

また六十一句本は、他の二本よりも兩姫が剃髪出家するいきさつが詳細に記されている。出家後の兩姫については、②の説が次のように記されている。

その後松虫鈴虫は

加太が浦より船に乗り

安芸国なる岐島

光明三昧院に着き

住蓮安楽二方の

菩提を弔いたまいしに

折りしも松虫局には

三十五歳の御歳にて

その後鈴虫局には

四十五歳の御歳にて

光明輝き華も降り

紫雲棚引き極楽の

音楽歌舞と諸共に

消えて儚くなりたまう

粉河（寺）に身を隠した両姫が両上人の菩提を弔うために、加太浦より船に乗って安芸国厳島の光明三昧院（光明坊）にたどり着き余生を過ごしたと伝えている。この記述のうち、「厳島」は「生口島」のことであって、これは現存する三本の六十一句本に共通する誤りである。詠い継がれていく、いわゆる伝承の中で「いくちしま」が「いつくしま」に変わっていったのか、あるいは生口島は因島と大三島の間にある小島であることから知名度も低く、制作当時からの誤りであったとも考えられるであろう。この六十一句本は両上人の処刑について詳しく伝えているが、法然上人の流罪の記述はない。

このように三種類ある同名異本の『松虫鈴虫和讃』は、それぞれ両姫の出家剃髪のいきさつを中心に述べている。二十句本、三十七句本は法然上人の流罪が併記され、六十一句本は両上人の処刑が併記されている点に特徴がある。その中で、三十七句本は、住蓮房が法然上人の身代わりとなった説と関連があるように考えられる。また、六十一句本には現存する三本ともに共通した誤りがあることを指摘しておきたい。

小稿は、建永の法難や「安楽寺略縁起」について考察した論述の中で、指摘できなかった二、三の問題について検討した。先出の論文と併読賜われれば幸甚である。

註(1) 拙稿「諸伝にみる建永の法難(一)——住蓮房と安楽房を中心として——」(『西山学会年報』第五号所収、平成七年六月発行、以下論文(一)と省略)。同「諸伝にみる建永の法難(二)——住蓮房と安楽房の処刑地を中心として——」(『法然上人研究』第五号所収、平成八年四月発行、以下論文(二)と省略)。同「安楽寺略縁起」の成立過程に関する研究——専想寺所蔵・談義本『松虫鈴虫物語』の成立とその周辺——」(『西山学会年報』第七号所収、平成九年六月発行、以下論文(三)と省略)。

(2) 前掲註(1)の論文(三)において、その全文を紹介した。

(3) 前掲註(1)の論文(三)を参照。

(4) 前掲註(1)の論文(一)、(三)を参照。

(5) 伝隆寛上人作『法然上人秘伝』や『正源明義抄』など。

(6) 『法然上人伝全集』二二四～二二五頁。

(7) 『同右』九七六頁上段。

(8) この点については、前掲註(1)の論文(三)で詳しく述べたので参照されたい。また、自坊である住蓮山安楽寺(京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町)の本堂内西側には、法然上人張子像(七十四歳のお姿)と並んで、親鸞聖人旅姿像(三十五歳、越後国御流罪のお姿)が安置されていることや、今日、自坊へのおよそ七割の団参が、全国各地からの浄土真宗の寺院であることがこのことを物語っていると考えられる。

(9) 『真宗聖教全書』二 宗祖部七九四～七九五頁。

(10) この点について、平雅行氏の論文「建永の法難について」(『日本中世の社会と仏教』第三編八所収、平成四年十一月、塙書房発行)には、建永の法難の勃発原因について、諸先達による研究成果とともに詳しく論じられている。

(11) 前掲註(1)の論文(二)では、住蓮房が安楽房と同日に処刑されたことに對し疑問を投じた。

(12) 『高田本(法然上人伝)』(『法然上人伝全集』五一五頁b)。

(13) 前掲註(1)の論文(一)を参照。

(14) 同右。

(15) 平成九年度西山学会における佐伯良雄氏「『選択集』の附属について」と題する発表の資料より引用。

- (16) 稲田順学氏・稲田廣演氏『決答授手印疑問鈔』縁起二種の比較(『深草教学』第十七号所収、平成九年六月発行)を参照。

- (17) 『真宗資料集成』第五巻談義本六七七頁b。

- (18) 同右六七八頁a。

- (19) 前掲註(1)の論文(三)を参照。

- (20) 浄土真宗西本願寺派易行寺には、住蓮房・安樂房に関するお歌が数多く伝えられている。

。「とげがたき苦しみの輪をぬけ出でて 此世からなる心安樂」(安樂)

。(法然)「苦をぬけて身を安樂と思ひなば 苦にかはりけん御恩忘るな」

。「消えがたき炎の車に引替へて 蓮の上に住ひとぞなる」(住蓮)

。(法然)「慈悲ふかき弥陀の恵みにあへばこそ 同じ心も蓮とぞなる」

。「哀れなる浮世の中にすごす身を 知りつつ捨つる人はつれなき」(鈴虫)

。「思ひきや花の相をおしむ共 末の薪をいかで忘れし」(松虫)

。「おしみづつ野辺の薪となさん身を おしまで宿る花の台ぞ」(安樂)

。「身になれし錦の小袖やきすてて 弥陀のみ国に墨へ住染の袖」(上松虫下鈴虫)

。「かくて行くかりの此身と今日限り あはん蓮の台にてこそ」(上安樂下住蓮)

。「かりの身の化業は何れちがへ共 向へたまへや蓮の台で」(首切り役佐々木ノ九郎吉実)

- (21) 浄土宗鎮西派願成寺は天平年間(七二九〜七四九)行基の建立で、もとは観音寺といわれた。しばらく荒廃していたが、安元年間(一一七五〜七七)に住蓮房がこの地に阿弥陀仏を安置して一寺を建立し願成寺として復興した。建永二年二月、住蓮房が馬淵で斬首される時、「私は弥陀の仏力によって蓮と化すから、これをよく見てその尊きを知れ」と言った。遺言の通り首は蓮と化して烏がくわえてこの地に再来し、村人らはこれを厚く葬ったという。以後「上野」の地名を「烏原」と改め、烏原のあたりの坂を住蓮坂という。山内には住蓮房の五輪石塔がある。

- (22) 前掲註(1)の論文(三)を参照。

- (23) 野田憲雄氏著『住蓮山安樂寺鹿ヶ谷因縁談』(明治三十二年五月、永田文昌堂刊)。

(24) 本論で示したほかに「安楽寺略縁起」、生口島光明坊蔵「安芸国御寺光明坊略縁起」、談義本『松虫鈴虫物語』などがある。

(25) 絹本着色、江戸時代成立。

(26) 『仏教和讃集』一七六～一七七頁所収本（昭和六年二月、東方書院発行）。

(27) 『日本歌謡集成』巻四 四一～四二三頁所収本（昭和三年七月、春秋社発行）、『仏教和讃御詠歌全集』下巻一四〇二～一四〇四頁所収本（昭和六十年五月、国書刊行会発行）。

(28) 三十三句から引用。

(29) 『仏教和讃五百題』五三八～五四一頁所収本（大正五年四月、藤井佐兵衛氏発行）、前掲『仏教和讃御詠歌全集』下巻一四〇五～一四〇八頁所収本。安楽寺本『安楽寺松虫姫鈴虫和讃』（平成七年六月、安楽寺発行）。

(30) 五十三句からの引用。

(31) 広島県豊田郡瀬戸田町御寺。

(32) 前掲註(29)を参照。